

私の視点

「情報」を生か

の人は夢や憧れがしほむのを実感しているはずだ。

NHKで放送中の朝ドラ「おかえりモネ」の主演は「気象予報士」だが、東京のテレビ局の気象キャスターではなく、故郷の地で地域に密着した気象情報を発信している。

ちなみに、気象予報士は、従来、気象庁の専管であった天気予報を民間にも開放すべく誕生したもので、間もなく30年になる。この間、20万人以上が受験し、現在、約1万人の合格者が気象庁に登録されている。しかし、気象の職についているのは十数%程度とみられる。

近年、地球温暖化の影響もあって台風など気象現象による被害の甚大化があらわとなつてきている。河川の氾濫や暴風などにより、多くの命と財産が奪われている。一方で都市化やハイテク化による施設の利便性向上は、逆に突発的な浸水などの災害に対する脆弱性を増大させている。

災害が起きた時に必ず聞かれる言葉が「長年住んでいるが、まさかこうなるとは思わなかった」「たいたことはないと思った」「自分の所は大丈夫だと思つた」などである。人は危険が切迫しているにもかかわらず、日常生活の経験の中で現実を軽視しがちだ。その根底にあるのは災害の風化、気象現象に対する理解の不十分さ、避難経路の確認など実地踏査の欠如にある。

こうした過信を排して命を守るため、気象についてのより深い理解と実践的な取り組みが必要だ。国土強

朝日新聞
10月12日

元気象庁予報課長



ふるかわ たけひこ
古川 武彦

全国に「気象寺子屋」災害対策を

投稿:siten@sasahi.com
か、〒1104・8011(住所不要)朝日新聞オビ二オン編集部
「私の視点」係へ。電子メディアにも掲載します。掲載の場合、連絡します。

「ソフト」の充実が急務である。しかし、教育現場で気象に割かれる時間は極めて短く、概論的で、実践的な取り組みはほとんど見られない。そこで、かつて日本の津々浦々にあった「寺子屋」を模した「気象寺子屋」を全国で展開してはどうか。

「おかえりモネ」は、そのモデルの一つだ。学ぶのは気象にとどまらず、地震や津波も含めたい。ハザードマップの確認や避難経路の踏査もおこなう。台風や線状降水帯などの仕組みを理解し、大自然から天気の変化を予測する「観天望気」も体験する。台風が発生した時、避難までのタイムラインも作りたい。

気象寺子屋を置くのは集会所や公民館など身近な場が最適だろう。参加者は地域の老若男女、講師陣は気象予報士や防災士、気象庁OBたちで、授業は双方向に。パソコンやスマホに堪能な人たちには、いざという時に地域と自治体をつなぐ「情報飛脚」を担ってもらいたい。

地域に根差した気象寺子屋が全国へ広がれば、人々のつながりの復活や強化につながることは間違いのない。最後に、寺子屋の発足や運営には公的な手助けも願いたい。